

「巡礼」アーティスト 須田郡司についての覚え書き 真魚 長明

(須田郡司写真展「日本石巡礼」に寄せて)

須田郡司というアーティストがいる。彼は世界中を移動しながら、人々が祈りの対象としている、石や岩、磐座(いわくら)を撮影し続けている。彼がしていること、それは、ただひたすらに「移動」し、「記録」し、「発表」していることだけ、何かに取り憑かれたかのように、彼はこの惑星に点在する、特異な地点へ「移動」し、写真というメディアに「記録」し続けている。美術市場や写真のトレンドなど一向に気にすることなく、彼はただただ「巡礼」を続けている。その根源には何があるのか?、彼を見ていて考えることがある。ボクが彼の根源に見るもの、それは「コミュニケーションへの強烈な願望」だ。多くの巨石遺構が山中にポツンと佇んでいて、それ自体はきわめて静かな存在であるのに、また同時に、外部との「コミュニケーションへの強烈な願望」をアピールしているように、ボクも須田郡司という存在に、どうしようもないほどの「コミュニケーションへの強烈な願望」を感じてしまうのだ。(彼が本来、肉体表現を主とするパフォーマーであることもその大きな一因かもしれない。)

須田郡司の写真集「VOICE OF STONE」の最後のページにセルフポートレートがある。須田郡司はその写真の中で、天狗の姿で、森の中の大きな木を背に、腕を組んで何かを思索している。この写真こそ、まさにアーティスト、須田郡司の本質を見事に表現したセルフポートレートなのだ。



「セルフ・ポートレート」

須田郡司の最初の写真集「VOICE OF STONE」を手にした時、ボクはリチャード・ロングの作品群を思い起こしていた。リチャード・ロングは、ランド・アートを代表する作家で、ボクが好きな現代美術作家ナンバーワンでもある。須田郡司の、世界中の石や岩を無心に追い求める姿と、その結果(記録)としての「特別な意味をもつ場所を撮影した写真」が、ボクにとってはリチャード・ロングの一連の仕事とオーバーラップして見えたのだろう。リチャード・ロングについて、テイト・ギャラリーの元館長・ニコラス・セロータは、「彼の作品は『歩行』することで生まれる。作品は、地図の上に引かれた線や、行程の途中で書きとめた、場所や目印、音などを記したテキスト、特別な意味をもつ場所を撮影した写真、あるいは歩行の途中でつくられた彫刻や地面に残された文様などによって記録される。」と書いている。リチャード・ロングというアーティストにとって、作品を制作することとは、「歩く」ことにほかならない。重量のある「身体」という存在を、あるルールや目的にそって「移動」させること、彼にとっての作品づくりは、すべてそこから始まるの

だ。これは、須田郡司が「巡礼」することなしに自らの表現をスタートできないこととまるで同じ事なのだ。



“Evolution Circle” リチャード・ロング

リチャード・ロングは歩行について、「歩行とは空間と自由の表現である。それは他人の想像力のなかでも存在しうるもので、それ自体がまた新たな空間でもある。」と書いている。ランド・アートという現代アートとしての歩行 — 移動、そして巡礼という「行(ぎょう)」としての歩行 — 移動。ボクにはその二つの歩行—移動が、本質的にとても近いものに見えるのだ。「歩行とは空間と自由の表現である。」というロングの言葉は、そのまま須田郡司にもあてはまりはしないだろうか。軽ワゴンに機材一式と生活用具を積み込んで、日本中の津々浦々の石や岩を巡礼するその姿は、そのまま彼にとっての「空間と自由の表現である。」といえよう。

ここで、ボクは「須田郡司」というアーティストをリチャード・ロングと同じく、一人の現代美術作家、一人のランド・アート作家として再認識することを提案したいと思う。この列島に遍する祈りの場を、自ら歩き記録する、その記録された写真は、須田郡司というアーティストによって、再びイワクラ・マンダラとして再構成されていく。彼は単なる石の写真家などではない。歩き、移動し、記録し、構成する大地の現代美術家として、ボクは須田郡司というアーティストを認識している。そして、その活動の未来にもまた無限の可能性を感じ、どんな世界を見せてくれるのかワクワクドキドキしている。どうか、概念に支配されることなく、足で思い、手で考える、身体的現代美術家として、須田郡司という名前を覚えていてほしい。きっと、あ、あの時の!、と思う時が来るはずだから。